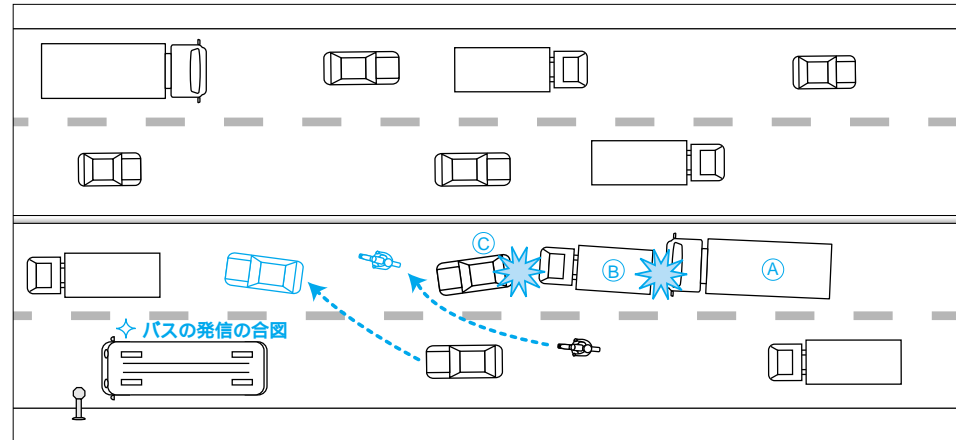


# 職場における交通安全指導

Part 73

事故事例に学ぶ  
40

## 渋滞時における玉突き追突



### 事故の概要

#### 発生状況

日時：平成20年5月某日 午前8時頃  
天候：曇り

#### 道路状況

片側二車線の県道で交通頻繁な道路

#### 事故の当事者

運転者A(11tトラック): 45歳、男性  
被害者B(軽貨物車運転者): 28歳、男性  
被害者C(普通乗用車運転者): 58歳、女性

#### 被害状況

A: 前部バンパー破損  
B: 頸椎捻挫、全身打撲等(全治1か月)  
C: 頸椎捻挫(全治1か月)

### 事故状況

運転者Aは、現在の会社に入社以来、普通貨物自動車(2t)で配送業務に携わり、運転業務歴が18年になるベテラン運転者である。経験豊富で業務にも精通していたことから、最近は大車任せられ、自動車部品の搬送業務に専従していた。

過去の事故歴を見ると、追突による軽微な人身事故が1件、構内における物損事故を3件起こしており、その都度会社から注意力の弛緩を指摘されていた。

事故当日は、遠距離への搬送であったことからいつもより早めに会社を出発した。

当該道路は片側二車線の県道で、都心に繋がっていることから交通は頻繁であり、折から当日は緊急の道路工事の影響もあって、発進停止を繰り返すようなノロノロ運転の状態であった。

目的地への指定時間が迫る中で、車はまだ会社から数キロ程度しか進んでいなく、遅々とした交通状況から、Aは内心かなり焦りながら進路変更を繰り返し走行を続けた。

しばらく第二通行帯にいたAは、前方左側のバス停からバスが発進の合図を出しているのを認めたものの、自車の走行に支障はないと判断し、ラジオの交通情報を聴きながら漫然と走行した。

そのうち前方で第一通行帯を走行していた普通乗用車が、バスの発進の合図を見て第二通行帯へ進路変更してきた。続いてその直後を走行中の二輪車も急に加速しながら大きく膨らむように第二通行帯へ移行した。

一方、第二通行帯を走行していた普通乗用車Cは、ノロノロ運転の状況の中で幾分前方の流れがスムーズになったのを見て加速したが、その直後、二輪車が目の前に突然現れたため、驚いて急停止した。車間距離を詰めてCに追従していた軽貨物車運転のBも、その状況を見て危険回避のため急停止した。

その時Aは、遠方を見ながら車間距離を詰め、漫然と走行を続けており、前車Bの急停止に気付くのが遅れ、慌てて急ブレーキを掛けたが間に合わず追突し、更にBを押し出しCに玉突き追突し、双方に怪我を負わせた。

この事故の直接の原因は、Aが遠くを見ながら漫然と走行し前方注視を怠ったことであるが、その背景にはノロノロ運転を繰り返す中で焦りが生じ、注意力が弛緩したことが挙げられる。

### 安全指導

#### 注意力の喚起

Aは、運転経歴18年のベテラン運転者で、しばらく事故もなかったことから徐々に過信が芽生えていました。それがいつしか「自分は事故を起こさない」という安易な自信に繋がり、事故への危険意識や警戒感が希薄になり、注意力の減退を生じ、その影響が出ました。

Aは、当日多忙な業務であったことから、仕事の段取りだけに頭を巡らし、安全への着眼もなく出発しており、運転者として安全運転への配慮が欠けていたことは否めません。何事も始めが肝心で、車の運転も同様に最初の気構えが安全運転上大切なこととなります。

平素の運行前点検に加え、ハンドルを握る前に一度、脳裏に安全運転を誓う注意を呼び起こし、気持ちを引き締め運転することが肝要です。

注意を呼び起こすには、出発前に過去の事故を振り返るなど動機付けは様々あると思いますが、その注意の喚起があって初めて、その日の一連の運転行動を安全へと導いてくれます。

運転開始時は、ただ何気なくハンドルを握るのではなく、安全運転を誓う「注意の喚起」に努め、気持ちを引き締めてから出発しましょう。

#### 自己管理の徹底

Aは、ノロノロ運転の状況に焦りが生じ、イライラした心理状態でした。心理的に動揺した状態で車を運転することは、事故の危険要因として最も高い状態にあったといえます。

急ぎ・焦り・過信等、心の中に潜む事故の危険要因は払拭しなければなりません。

運転する際は、心の乱れをしっかりコントロールして、「平常心」を保つことが重要です。心穏やかでリラックスした状態、そのような「平常心」でハンドルを握ることが、運転の三要素である認知・判断・操作がミスなく的確に行えることに繋がります。

長年、無事故・無違反の優良ドライバーに調査した結果を紹介しますと、自分の運転に関して、

- ①運転は「下手」と評価している。
- ②平常心を保つ「自己管理」をしている。
- ③常に運転を振り返り「工夫」している。

と、共通する結果が出ています。

注意力を保持し、いざという時の集中力を高めるためには「平常心」で運転することが最も重要です。

その「平常心」を保つためには、普段から「体調をベストに」「時間に余裕を」「気持ちにゆとりを」が持てるような「自己管理」が必要です。

#### 危険の予測

Aは、前方のバス停からバスが発進の合図を出している状況を認知すれば、バスの発進保護のため、後続の車両は一旦停止するか、進路変更をすることが十分予想できました。

また、大型車は見渡す視線が高いため、往々にして直前の小型車両を見落とす危険性があるのに、Aはこれらに対する危険意識や警戒心が全く欠如した状態で追突事故を起こしました。

トラック運転者は、見えない危険を事前に読み取る「先を見通す眼」をフルに働かせ、「危険を予測した運転」を実践しましょう。

#### 漫然運転の防止

発進・停止を繰り返すようなノロノロ運転の状況の中では、次第に事故に対する危険意識が薄れ、注意力が減退し、漫然運転に陥りがちです。漫然運転による事故を防止するには、プロの運転者として確固たる自覚を持ち、初心を忘れず常に謙虚な気持ちで自分の運転を振り返りながら、安全運転の最も基本である「安全確認」を徹底しましょう。

### 平成19年度 当組合の追突事故発生状況

対人事故 発生件数275件(構成割合46.7%)

対物事故 発生件数349件(構成割合22.2%)

原因別にみると、それぞれ「前方不注意」が最も多く、対人事故で63.6%、対物事故で59.3%を占めています。

### 追突事故防止

- ①安全な速度と車間距離を厳守する。
- ②危険意識を持って運転に集中し、脇見運転、漫然運転はしない。